

近代日本の「美術」受容における「書」の制度史的展開

著者	柳田 さやか
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2017
報告番号	12102乙第2871号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153505

博士論文

近代日本の「美術」受容における「書」の制度史的展開

平成 29 年度

柳田さやか

筑波大学

論文構成

序章

- 第一節 本研究の背景
- 第二節 「美術」受容における制度史研究史
- 第三節 「書」と「美術」をめぐる研究史と課題
- 第四節 本研究の目的と意義
- 第五節 本研究の方法と構成

第一部 「書」の揺動 —「美術」の誕生と形成—

(明治初期～明治 10 年代)

第一章 「書ハ美術ナラス」論争の諸論点

- 小 序
- 第一節 「美術」誕生と「書ハ美術ナラス」論争
当時の「美術」観
- 第二節 「書ハ美術ナラス」論争の概要と先行研究
- 第三節 小山正太郎の「書ハ美術ナラス」
- 第四節 岡倉天心の「書ハ美術ナラスヲ読ム」
- 第五節 「書ハ美術ナラス」論争の反響
- 小 結
- 図 表

第二章 博物館の「古物」観と「書画」

- 小 序
- 第一節 湯島聖堂博覧会・聖堂書画大展観と「書」
- 第二節 壬申検査と「書」
- 第三節 文部省博物館・博物館の「古物」観と
「芸術部」
- 小 結
- 図 表

第三章 内国勸業博覧会・竜池会における「書画」

- 小 序
- 第一節 内国勸業博覧会の「美術」観と「書」

第二節 竜池会の「美術」観と「書」

第三節 観古美術会と「書」

小 結

図 表

第二部 「書画」の分離 —「美術」制度の確立—

(明治 20 年代～明治 30 年代)

第四章 「書ハ美術ナラス」論争の影響と展開

- 小 序
- 第一節 書道界における「書」の非「美術」論
- 第二節 書道界における「書」の「美術」論
- 第三節 国学者・漢学者における「書」の「美術」論
- 第四節 美術界における「書」の「美術」論
- 小 結

第五章 内国勸業博覧会・日本美術協会における 「書画」分離

- 小 序
- 第一節 六書会の展覧会開催
- 第二節 内国勸業博覧会の「書画」分離と「書」廃止
- 第三節 日本美術協会と六書協会
- 小 結
- 図 表

第六章 博物館・東京美術学校の「書画」分離と 「書道史」形成

- 小 序
- 第一節 帝国博物館・東京帝室博物館と「書」
- 第二節 東京美術学校と「書」
- 第三節 小杉楹邨の『大日本美術史』
- 小 結
- 図 表

第三部 「書」の独立 —「東洋美術」の再評価—

(明治 40 年代～大正初期)

第七章 「書」の「美術」からの独立論

小 序

第一節 美術界における「書」観の展開

第二節 書道界における「書」の「美術」論の展開

第三節 書道界における「書」の独立論

小 結

第八章 書家達の独立と文部省美術展覧会・博覧会

小 序

第一節 日本書道会と「美術」への参画

第二節 談書会と「美術」からの独立

第三節 展覧会における「篆刻」と「書」

小 結

図 表

第九章 「書」の出版の独立

小 序

第一節 美術雑誌と書道雑誌

第二節 書道全集の萌芽

第三節 「美術史」の単著化と「書道史」

小 結

図 表

第四部 「書」の体系化と普及 —「美術」から「芸術」へ—

(大正 10 年代～昭和 20 年)

第十章 「書」の「芸術」論とその普及

小 序

第一節 前代からの深化

第二節 「書」の「芸術」論

第三節 「書」の普及

小 結

図 表

第十一章 展覧会・博物館・学校教育にみる

「書」の普及

小 序

第一節 平和記念博覧会と「書」

第二節 日本書道作振会の運動

第三節 中村不折と書道博物館

第四節 教育振興運動と芸能科習字・書道

小 結

第十二章 出版にみる「書道史」の体系化

小 序

第一節 「美術史」単著における「書」

第二節 「書道史」の単著化と図譜

第三節 『書道全集』の誕生

小 結

図 表

終 章

第一節 各部の総括

第二節 本研究の成果の回顧と今後の課題

参考文献

謝 辞

論文要約

本研究は、近代日本の「美術」概念の受容をめぐる「書」の理論を分析し、美術諸制度における書の位置、書道界の動向を追うことによって、その史的展開を考察するものである。

近代日本の美術制度の研究は1990年頃から盛んとなり、美術概念や美術史の成り立ちを問い直す動向が見受けられた。先行研究では、明治初期に美術の語が誕生した後、「書画」という枠組みは絵画と書に分離し、書は美術から除外されたと指摘されている。これまで、美術概念や美術制度における書の位置を探る必要性は認識されてきたが、長い間課題として残されてきた。近代書道史の個別的な研究は着実に進行しつつあるが、書と美術をめぐる理論や、美術制度の側面からみた書の位置、書道界の動向に関しては体系的な研究に至っていなかった。

本研究を通し、美術の境界にあった書の史的展開を考察していくことは、美術概念の形成と揺らぎを探る指標となり得る点で重要である。また、書の評価史の観点から書道史を再編していく点においても意義深いと考える。

研究の方法・構成として、近代日本における書の理論・制度の段階的な変遷を探るべく、以下の4期に時期区分をおこない、この区分が可能であるかを4部構成で論証した。

I期 明治初期～明治10年代 (第一部)

II期 明治20年代～明治30年代 (第二部)

III期 明治40年代～大正初期 (第三部)

IV期 大正10年代～昭和20年 (第四部)

各部は書の理論史と制度史の両研究で成り立っている。理論史では、美術と書に関する著述、雑誌、新聞記事等により、当時の理論を時系列に辿り、書に対する評価の変遷と特徴を明らかにした。また、制度史では博物館、展覧会、出版、教育等の諸制度を通観して書の位置を探り、それに対する書道界の動向を考察した。この理論と制度がどのように呼応していたのかを検討することによって、近代日本における書の史的展開の体系化を試みた。以下、各部を総括し、それを踏まえて本研究の最終的な結論を提起したい。

(一) 第一部の総括 (I期)

第一部では、明治初期から明治10年代までをI期とし、明治5年(1872)に美術の語が誕生し、美術概念が徐々に形成されていく中で、書の位置が揺動する過程を追った。

まず、書と美術をめぐる理論としては、小山正太郎と岡倉天心による明治15年(1882)の「書ハ美術ナラス」論争が一つのエポックであった。論争の反響として、当時の雑誌記事により、書を言語の符号と捉えて「書ハ美術ナラス」とした小山の論への賛成者が多勢であったことが窺えた。論争以後、書の特質として実用性が中心に論じられ、その価値が揺らいでいくことを踏まえると、小山の言語符号説はその後の書の捉え方を方向付けるものであったといえる。そもそも近

代以前には、「書画」は一体的な概念であり、書を言語の符号と捉えて否定する考え方自体が存在しなかったのである。

ただし、この時期の展覧会の制度に注目すると、書の非美術論は必ずしも小山によって始まったわけではなかったことが分かる。まず、明治5年(1872)に開館した博物館における書の位置をみていくと、博物館の列品区分では書画を芸術に含んでおり、書を軽視する風潮は見受けられない。同7年(1874)に博物館で開催された湯島聖堂書画展覧会においても、「新古書画」の枠組みが提起され、書は新・古ともに画と対等に扱われていた。

一方、殖産興業政策の一環であった内国勸業博覧会においても、明治10年(1877)の第一回、同14年(1881)の第二回では、書は書画として美術の区分に出品された。ただし、第一回の博覧会報告書には、書は西洋において美術に列しないが、日本の「風土ノ慣習」によって美術区分に入れたことが敢えて注記されており、書が少なくとも西洋的な美術観には含まれないという共通認識がすでにあつたことが窺える。

また、博覧会運営に関わる官僚達が多く参加した竜池会の会則をみると、博覧会と同様に書を東洋独特の美術と注記して美術概念に含めたが、最初期から書画という一体的な概念はなく、画と書に分離していた点の特筆される。加えて、竜池会の動向を記した『大日本美術新報』の「大日本美術新報緒言」では美術の定義に書を含んでおらず、書を美術に含めるか否かは竜池会会員内で差異が生じ始めていたことが窺えた。また、竜池会主催の観古美術会においても、古製品としての書は僅かに出品されていたが、新製品の書の出品は求められていなかった。よって、美術誕生から明治10年代前半において、書の非美術論は表立ってはいないものの、すでに潜在していたことが明らかとなった。

(二) 第二部の総括(Ⅱ期)

続く第二部では、明治20年代から明治30年代までをⅡ期とし、美術諸制度において書画の枠組みが絵画と書に分離していく中で、書道界に書の美術論が現れ始める様相を跡付けた。

明治20年代初頭は美術諸制度が確立する画期であり、とりわけ東京美術学校、帝国博物館、内国勸業博覧会において書画が分離していく。美術界の中には瀧精一のように書を擁護する者もいたが、書の非美術論が優勢であり、美術諸制度においてもそれが反映されていく。まず、明治22年(1889)には東京美術学校が開校したが、ここでは絵画科、彫刻科、図案科の3科が開設され、書の学科開設はもとより構想されなかった。

博物館に目を向けると、明治22年(1889)に帝国博物館は宮内省の管轄となり、美術部を新設する。ここで、列品区分の書画は書と絵画に分離し、絵画や彫刻が美術概念の筆頭に位置付けられた。ただし、博物館は宝物調査の事業の中で書も調査していたことが窺える。しかし、宝物調査の成果を反映させて編んだ官製の『稿本日本帝国美術略史』では書を取り扱うことはなく、美術の文脈で書が語られることはなかった。これは明治22年(1889)に創刊した『国華』においても同様で、書の取り扱いを決して多くなかった。

さらに、内国勸業博覧会では、明治23年(1890)の第三回で初めて書画が分離し、やがて同36年(1903)の第五回では書の出品区分が廃止される。時期を同じくして、竜池会の後身であ

る日本美術協会は、明治 21 年（1888）から美術展覧会を開催し始めた。書は古製品の書画の区分で僅かに出品されるのみで、やがて出品区分が新画と古画に改められる中で実質的に美術から切り離されていった。

このような中、書道界では書の美術論が表立って現れ始める。これまで「書ハ美術ナラス」論争の書道界への反響はなかったとされてきたが、実際には明治 20 年代から反響が明確に現れ始めていた。書家達は、小山正太郎の書の符号説を否定する形で、書の実用性を美術性と相対するものと捉え、書を実用と美術との二種類に分ける考えや、書が実用を超えた美術とする考えを表明した。

書の美術論の顕在化の例としては、書家達の六書協会の設立、小杉楹邨の『大日本美術史』刊行が挙げられる。書家達は先述の日本美術協会の対応への反動として、明治 35 年（1902）に日本美術協会内に六書協会を設立し、絵画と同様の取扱いを求めて六書展覧会を開催した。結局、日本美術協会は同 39 年（1906）に六書展覧会の閉会を言い渡すこととなるのだが、書家達が積極的に美術を志向し、絵画に対抗した書道団体を設立した動向は特筆に値する。

また、小杉楹邨は明治 28 年（1895）に『大日本美術史』を刊行する。『大日本美術史』は美術史の名を冠して、日本書道史を実証的に通観した画期的な出版物であった。先に述べた通り、東京美術学校に書の学科は設けられなかったが、小杉は岡倉天心に招聘されて、明治 27 年（1894）から予備課程の「書学」講義を担当した。ここで小杉は日本書道史を講義しており、この講義や文献考証、宝物調査の成果をもとに『大日本美術史』を刊行したのであった。

（三）第三部の総括（Ⅲ期）

さらに第三部では、明治 40 年代から大正 9 年（1920）までをⅢ期とし、東洋美術が再評価されていく中で、書が美術から独立して発展していく傾向を考察した。

この時期、書の非美術論は前代から引き続き世論として根強く潜在しており、明治 40 年（1907）開催の文部省美術展覧会に書の部門を設けなかったことはその決定的な出来事であった。それと軌を一にするように、書道界では明治 40 年（1907）に日本書道会と談書会、同 44 年（1911）に法書会が設立され、書道団体設立の画期を迎えていた。

まず書家達の理論をみていくと、書家達は「書ハ美術ナラス」論争を旧論と捉え、西洋の翻訳語として誕生した美術の存在自体を絶対視しなくなり、東洋独特の書の存在をより強く自覚し始める点が新しい。例えば、西洋的な美術観に依拠して書の非美術論を唱えていた中村不折が、大正期には書を東洋的な美術、芸術として再評価していく。さらに、書家達の中には書は書であるとその独立性を謳う者も現れ、東洋書画の独自性として書画一致や書画同義、気韻や主観、人格の発露という観念が改めて捉え直された。

書家達の動向を探ると、書の独立の気運には二つの方向性があった。まず、Ⅱ期に六書協会の閉会を言い渡された書家達は、日本美術協会から独立して新たに日本書道会を設立し、書の展覧会を開催しつつ、あわせて美術に対する参画運動も積極的に展開するようになる。書家達は書画一致を根拠として書を東洋美術と位置付け、文展や博覧会へ上申書・建議書を提出した。果たして、明治 45 年（1912）の第二回東京勸業博覧会では美術の区分に書が加えられ、運動の成果を

あげた。

一方、同年に設立された談書会は、近世からの書画会の形式のように、会員の書家達の間で会合を開いて書跡鑑賞や席上揮毫をおこなっており、美術から独立した団体であった。特に談書会の中心人物であった日下部鳴鶴は、日本書道会の文展参画運動に否定的であった。このように、書道界全体としては書として独立の気運が高まる中、美術に対する姿勢は大きく分けて参画派と否定派の二様が混成していた。

さらに、出版の制度に目を向けていくと、明治40年頃から数多く刊行された美術全集は絵画、彫刻、建築に比重が置かれており、書が美術全集に掲載されることは極めて少なかった。そうした中、審美書院から刊行された『支那墨宝集』は、美術全集と近似した形式を採りつつ、美術史とは別に書道史が独自に形成されていく一例であった。また、書の研究の発展を会則に掲げた法書会は、書専門の研究雑誌『書苑』を『国華』に倣った形式を採りながら刊行した。美術史は体系立った出版物が備わりつつある中、書道史はまだそのような状況に至っていなかったが、書家達による『書苑』の刊行は古筆、金石、古文字、書論等の各論研究の発展を導き、結果としてIV期の平凡社の『書道全集』誕生の体制を整えることとなった。

(四) 第四部の総括 (IV期)

最後に第四部では、大正10年代から昭和20年(1945)までをIV期とし、美術・芸術概念が再考されていく中で、書道界は芸術としての書の普及を喫緊の課題とした様子を考察した。

まず、書家達の動向として、書家達が書の普及を強く意識し始めた画期は、大正11年(1922)の平和記念東京博覧会であった。平和記念東京博覧会では、書は美術ではなく、教育及学芸の部に編入となった。田口米舫等は書を学芸とする考えはむしろ受け入れるべきという姿勢を示して帝国書道会を設立する。この流れの中で、書の普及を目指した書家達は団結して日本書道作振会を設立する。日本書道作振会は、東京府美術館での展覧会開催や、衆議院・貴族院への請願書の提出によって、書の展覧会と学校教育の振興をあわせて図っていった点が新しい特徴である。

この時期の書家達は、美術よりも芸術への志向を表明し始める傾向が強まる。中でも、書は主観を表現する芸術とした瀧精一の考えは、やがて上田桑鳩や石橋犀水のように、書を造型芸術、空間芸術、時間芸術と捉える動きに展開していった。また、書家達は書が実用性と不分離である性質を認識した上で、その芸術性を説くようになっていった。最終的には尾上柴舟や石橋犀水のように、実用と芸術のどちらにも偏しない用美一体の説が唱えられ、展覧会活動と共に、学校教育の重要性が主張された。それは学校教育における芸能科習字・書道の設立に繋がり、戦後の大学教育学部の書道科設置に結実することとなる。

また、III期に続いて出版に注目すると、美術史研究の進展に伴い、書家達の間で書道史研究の重要性がさらに認識され、大正10年代には書道史を通観する図譜、昭和初期には書道史の単著が陸続と刊行された。その後、昭和5年(1930)から初の『書道全集』が平凡社から刊行されると共に、同時期には雄山閣の『書道講座』も刊行され、書道史の体系化と普及は急速に図られた。書道史の単著や図譜が刊行された背景として、学校教育における書の不振に危機感をもった比田井天来が、大正期に「文検」の試験内容に書道史を導入したことが考えられる。書道史は美術史

の形式を模範とし、それとの並立を試みながらも、書として独立して進展して、最終的に普及が図られていったのである。

以上の各部の考察を総合すると、明治初期から昭和 20 年（1945）までの書の理論と制度の史的展開は、以下のような段階的変遷を跡付けることが可能である。

I 期では、美術の語が誕生し、博覧会を通して美術概念が徐々に形成されていく過程で、特に竜池会で美術に対する書の位置が揺動し始める。続く II 期では、博覧会や博物館、東京美術学校等の美術諸制度において書画が分離していく中、多くの書家達は書の美術論を主唱していく。III 期では、それ以前の西洋主義が顧みられ、東洋美術が再評価されていく形勢の中で、書家達は日本書道会や談書会、法書会といった書の団体を設立し、書は書として独立していく向きが看取される。最後に IV 期では、書家達は平和記念東京博覧会を契機として、美術に対する多様な在り方を示しつつも、日本書道作振会を結成して一致団結し、展覧会、教育、出版の振興を通して書の普及を志向していった。

西洋化への急激な転換が図られた時代において、書は美術の境界に位置することとなり、時には美術との融合や並立を試みながらも、やがて書として独自の発展を遂げたのである。書における近代は、異文化の接触と受容の中で、自文化の在り方を模索しながら、その独自性を捉え直していく過程であった。